

4 第9章 (10) 「赤紙が来た」

戦争が遠くなった君たちへ

—戦時下の模擬家族と現代—

平井 敦子

1 はじめに

戦前のジャーナリスト清沢冽は『暗黒日記』(岩波文庫)の中で、1945(昭和20)年1月1日の日記に、「日本国民は、今、はじめて『戦争』を経験している」と書いている。わが頭上に空爆が襲うまで、戦争は「外で行う」ものだった。すでに終わった出来事として歴史を学ぶ身には、1931年以來大陸で戦争していたではないか、まさか、と思うものだが、今「戦前」の空気を感じ始めて、その意味がわかるような気がしてきた。

そのような中で学び舎教科書は、戦時下の暮らしをリアルに国民の体験に寄り添うように書いている希有な教科書だ。生徒には、ひとつひとつ紹介された事実を丁寧に読み、想像し学習してもらいたい。ただ、それでも「過去」のできごととしての理解になるかもしれない。それを教室で深め、「わがこととして」戦争を考えるような授業を工夫してみたい。

あの時代も、大正デモクラシーの自由な気風を謳歌していた人々もいた、豊かで幸せな生活もあったはず。それが戦時体制でじわりじわりと締め付けられ、「お国のために」言いたいことも言えない、できない時代になることを、どうにか生徒に実感をもってほしいと考えた1時間の実践である。

2 私の家に戦争がやってきた

○ 1930年代の家族と社会

・1930年の人口ピラミッドの図を示す(目線は、現代に生きる教室で学ぶ中学生。「富士山型!」というように、“学習対象”としての当時を見ている)。

「今と違って、子どもが多いね。兄弟ケンカとか、近所の友達と遊ぶとかして

いたんだろうね」

・当時の子どもたちが路地や空き地で遊ぶ写真を示す。

・そして、家族写真¹を示す。

「こんな感じかな。お父さん、お母さん、おじいさん、おばあさん。まだ小さいけどこの子が長男かな」「おじいさんは洋装。みんなおしゃれをして



¹

て、何かの記念写真だろうかね」

「三世代同居が多いし、本当に子どもが多かった時代だよ」

・モボモガの流行ファッションで歩く人々の写真²を示す。

「都会ではおしゃれな男女がいて、ファッションに関心を持つ人々が多かったけど、戦争がまたはじまってきた。人々の生活はどう変化したのだろうか」



²

戦争といえば、貧しい、厳しいという印象

はある。でも「昔」はもともとそんなに豊かではないのだから、という思い込みがないわけではない。だけど、大正時代には、大阪の通天閣とルナパーク（1912-1923年）のような娯楽施設もあったし、東京の賑わいもたいそうなものだったのだ。

授業は、「日中戦争」「第二次世界大戦」「アジア太平洋戦争」と、戦争の流れを見てきたところまで進んでいる。そして、学び舎教科書 p.242 の「(10) 赤紙が来た一戦時下の国民生活」である。

清沢冽が言うように、当時の人々にとって、戦争は「外地」の話だった。新聞やラジオは、政府の統制下に入っていた。勇ましい皇軍、愚かな中華民国政府や

国民、ものわりの悪い欧米各国…。都会や田舎の一部の知識人には、そう簡単な話ではないということがわかっている者もいただろう。留学経験者は多いし、国際ジャーナリストだった時代であり、1928年にはパリで「不戦条約」も結ばれるという時代の中で、日本が軍隊を大陸に広く展開しはじめたのだから。

ただ、庶民は毎日の生活が、平穩にすぎることが何よりなのだ。そして、満州国の成立や、南京政府の樹立や、大東亜共栄圏と「皇恩に浴する」地域の拡大という「心地良い世相」に満足していたろう…。そしてあと少し、あと少しで「勝利」が来るはずなのだ。

「今日は、みんなにそんな時代の模擬家族になってもらいます」

[学習活動]

- ・ 仮想で設定した6家族を示し、班に割り当てる。
- ・ 家族の配役をグループで相談して決める。
- ・ 決まった役をワークシートに記載する。

楽しそうに、わいわい配役を決める。「どんな家庭か、イメージできるかな」と言いつつ、グループに日々の生活を感じてもらおう。「私3歳（笑）！お兄ちゃん〜ん！」など盛り上がっているが…。

【模擬家族】

<p>1 2町歩の水田で生計をたてる小作農家</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ おじいちゃん 67歳 () ・ お父さん 44歳 () ・ お母さん 45歳 () ・ 二男 18歳 () ・ 長女 16歳 () ・ 次女 14歳 () ・ 農耕馬 1頭 <p>※20歳の長男 () 華北に出征</p>	<p>2 5町歩を開墾する満州農家</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ おじいちゃん 58歳 村の在郷軍人会の会長 () ・ おばあちゃん 54歳 () ・ お父さん 27歳 () ・ お母さん 26歳 () ・ 長男 8歳 () ・ 長女 3歳 () ・ 農耕馬 2頭 <p>※おじいちゃんは日露戦争従軍経験者</p>
--	--

<p>3 新聞社に勤めるサラリーマン家庭</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お父さん 45歳 () ・お母さん 45歳 () ・長男の奥さん () ・二男 21歳 大学の法学部に通う () ・長女 21歳 看護学校に通う () ・三男 10歳 () <p>※長男24歳 () は満州で従軍</p>	<p>4 函館で青函航路に従事する国鉄職員</p> <ul style="list-style-type: none"> ・おばあちゃん 67歳 () ・お父さん 45歳 () ・長男 20歳 () ・二男 18歳 () ・長女 14歳 () ・三男 10歳 () <p>※お母さんは亡く、おばあちゃんが家事</p>
<p>5 お好み焼き屋さんを営む町の食堂</p> <ul style="list-style-type: none"> ・おばあちゃん 60歳 () ・お父さんの姉 41歳 () ・お父さん 40歳 () ・お母さん 37歳 町内の国防婦人会の副会長 () ・長男 20歳 () ・二男 10歳 () <p>※お父さんの義兄はシベリア出兵で戦死</p>	<p>6 校長先生、先生の家族</p> <ul style="list-style-type: none"> ・おじいちゃん 58歳、根姓 () ・おばあちゃん 57歳 () ・お父さん 28歳 () <p>目が悪く兩種で召集されなかった教師</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お母さん 27歳 () ・お父さんの弟 20歳 () ・長女 9歳 () <p>※お父さんの弟 () は満州で従軍</p>

※これらの家族例は、学び舎教科書 p. 290「歴史を体験する 一人ひとりの歴史・家族の歴史」で聞き取りした事例や、地域の歴史掘り起こしから記録された事例など、実践者自身がリアルにわかるものだと良い。ここに掲載した家族は、私自身がそのように知った事例を組み合わせたものだ。

「これから、政府からの発表や指令を出していきます。自分の家族に何か変化があればワークシートに書いて下さい」

(1) 「赤紙」が来た

5 番お好み焼きの長男、出征です。6 番先生の家の弟、出征です。

4 番函館の長男、出征です。

そう言いながら、「赤紙」の復刻を、当該班の席に教師が配達する。

「何が書いてあるんだろう?」「いつまでにどこに?準備するものは?」

「家族はどう思う?一人いなくなることで生活はどう変化するだろう?」

想像して、自分の「役」の目で、ワークシートに記入する指示を出す。まだ戦時下の様子がわからず、あたふたしながらも、書いていく。

- ・働き手がいなくなる(父)
- ・お兄ちゃん…いなくて寂しい(妹)

- ・大丈夫かな?生きて帰って欲しいけど(母)

そんな様子を、「赤紙」をもらわなかった家族グループはにやにや見ているが。

「出征者のいない家族もぼーっとできません!何やっているんですか、町内の人は出征準備ですよ」

写真③・④を示す。

- ・出征する人がある家族やご近所の女の人は、日の丸の旗を作ったり、千人針を集めなければなりません。ほら、子どもでも手伝えるよ。

- ・近所の方は、大きな日の丸に寄せ書きを準備しましょう。ほら在郷軍人会のお父さん、先頭きってやらないと。国防婦人会のお母さん、日の丸の旗やたすきを持って見送りですよ。

- ・赤紙には「準備・持ち物」があります、用意しましょう。
- ・彼氏、彼女、恋人たちは?結婚式をする人も。



③ 納谷亀之助出征記念写真



④ 大日本国防婦人会京都・室町支部

そして、出征者には日の丸のはちまきやたすきを用意し、みんなの前で「立派に挨拶」させ、机いすをもって教室の後ろに移動させる。この後は家族からの手紙で、「内地」の様子を知ることになる、そういう形で引き続き授業に参加する。

(2) 「欲しがりません勝つまでは」と生活の統制が強まります

- 国民服令が制定されました。

「服を地味にすることになりました。でもユニクロで買うわけではありません。生地を手に入れ仕立てたり、以前着ていたワンピースや晴れ着も、仕立て直します」(写真⁵)

「だれが仕立てるのですか？」

「それはもちろん、お母さんや娘たち。家族みんなの分を考えなくてはね」

ええ〜と言いながら、ワークシートに次々書き込む。

- 金属供出になりました。

家族で何が出せるか相談しなさい。

「なべ…鉢…」

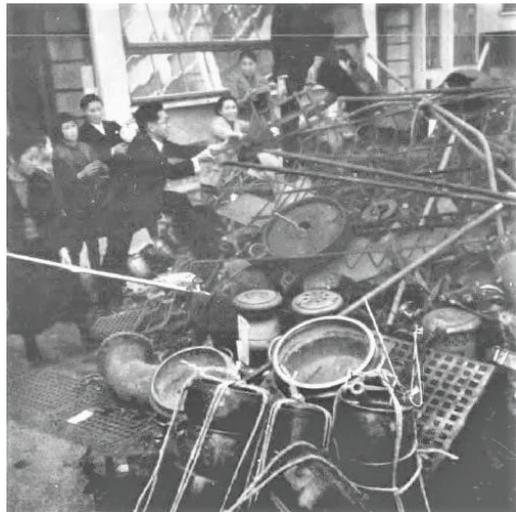
「いや、ダメだって、出したら困る」

「でも…」

「はい、国防婦人会のお母さん町内会で配付された金属供出チラシを持って、各家庭に声をかけて回りなさい。まだまだ出せるものがあるはずですよ、と」



5 写真週報 278号 1943年6月



6 写真週報 199号 1941年12月

当時の資料には、街灯の笠や、マンホール、コート掛けのフックなど、細かく例が書かれている。そんな出せるはずのものの一覧を読み上げ紹介する。

「教室も見回して下さい、何を出せますか？」

「あ、机の脚!」「ドアの取っ手…」

「あのパイプ」「うわあ、いっぱいある!」

お好み焼き屋さんの国防婦人会のお母さんは、役場の指示で金属チラシを持ち、各家をまわり説得に出たはずだ。奥さん、あれも出せますよね、これも…と。

「みなさんの家庭ではどうですか。まだ出せるね」

そして、お好み焼き屋さんは、ついに「鉄板」を出してしまいました。そうやって、北海道に移住した例があったということ、以前、生徒が書いた「わが家の20世紀」から教えてもらった。

○ 食糧や生活必需品は配給になりました。

いくらお金があっても、切符がなければ買えません。

- ・次々に配給品指定が増えます。
- ・お米も不足し、マメ、イモなどの代用食になります。
- ・農家の皆さんは、まだ食糧事情は大丈夫かもしれません。
- ・サラリーマンや、公務員はどうでしょうか。
- ・札幌の大通公園は、畑になっていきました。
- ・そして、その貴重な衣料切符も、新調は絶対止めて献納しようと、呼びかけられます。(写真⁷)

○ 少しでもお金があれば「貯蓄債券」が奨励されます。(ポスター⁸)

生徒はワークシートに書き込んでいく。次々と



7 写真週報278号1943年



8 大蔵省 1940年

政府から降り注ぐ命令に、ただひたすらに応え、我慢しながら。それでもまだ、爆弾は降ってこないのだ。勝てる、勝つ、「欲しがりません勝つまでは」。後どれぐらい我慢したら勝てるかな。3歳児は大丈夫？ 小学生になってたら、学校でも軍事訓練しているかな？ 将来は兵隊さんや看護兵かな…と、イメージをもっていく。

(3) 農家のみなさん「馬は兵器」です
馬を供出してください (ポスター⑨)

「馬がいなくなったら畑が…」

「南京の戦場で多くの馬の死体がありましたね、彼らも勇ましく、立派に出征したのです。軍馬として調教してから出ましたが、北海道仙美里の駅では貨車に乗りたくない、踏み板をガリガリ削ったといいます」

出征馬にも、りっぱなたすきや飾りがつけられ、村から送られたのだ。当時の写真を示しながら「総動員」体制を実感する。この授業では扱わなかったが、犬やネコが寒冷地で戦う兵隊さんのための毛皮になると、供出された。

地域に残る様々な資料が、徐々に生徒の身に「実感」として迫りはじめ、授業は緊張と静寂が支配するようになる。

(4) 志願兵の募集が盛んに行われるようになります。

「水兵、航空兵、機関兵、軍楽兵、看護兵、主計兵の6種、年齢17歳以上21歳未満。さて、農家の18歳、どうしますか？



⑨ 馬は兵器だ



⑩ 写真週報285号 1943年

新聞社の長女、19歳は看護兵になることができます」

「昔からよく近所で遊んでいた友人たちも志願すると言います。本人たちは、家族は、どうしますか？ 家族会議してください」

「行きたくないよ」

「そんなこと言う雰囲気ないじゃん」

「でも、お前が志願したら、うちの畑仕事どうなる？」

(5) 「銃後の守り」が叫ばれます

「女性も子どもも竹槍訓練や消火訓練に、そして勤労動員に出ます」

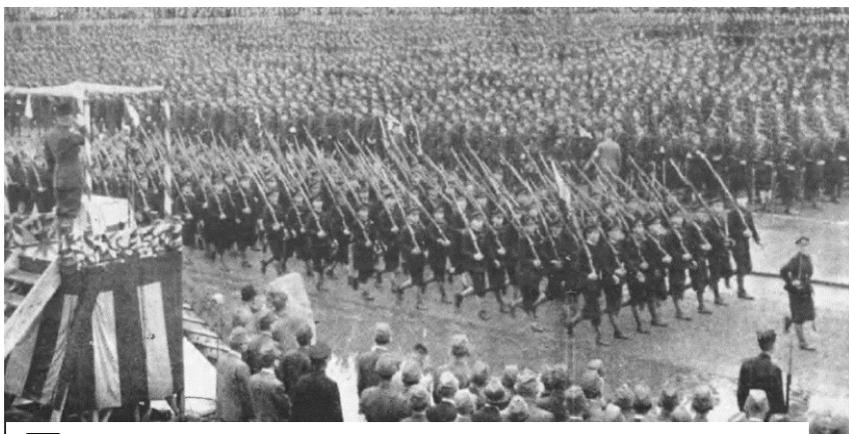
「お母さんたち、訓練に出て下さい。国防婦人会の会長さんが責任者です。在郷軍人会のおじいちゃん、指導して下さい」

「1番の農家の長女、次女、4番の長女、勤労動員です。工場に出なさい」(写真 [11](#))



[11](#) 写真週報318号 1944年

(6) 法令が変わりました。「学徒動員」が決まりました(写真 [12](#))



[12](#) 写真週報296号 1943年11月3日

「3番の法学部の二男、待ちに待った出征です。理学部はもったいない、研究開発にいそしんで下さい」

「え、いや、待ってないって！」

「なんでオレ？ 理学部ずるい」

(7) また「赤紙」です

「満州のお父さん、二度目の出征です。出征の準備やります。家族の生活はどうなりますか」

多くの聞き取りの中で、出征が二度も三度もという事例をきいた。

「丙種で徴兵されていなかった6番の家族の先生に、赤紙です」

(8) 新聞社のお父さん…

「特別高等警察が来て、連れて行かれました。取材仕事の途中で、風景を撮影した『罪』です。スパイだろう、と責められ釈放されましたが、右足が不自由になりました」

小林多喜二の学習をした際、生徒はその“痛み”を恐怖とともに感じていた。この国家総動員体制で、少しでも政府に、軍に目をつけられたら、という不安が襲ってくる。

「近所のおじさんが、特高に連行された。それを聞いてほかの家族は、どう思うでしょう。」 「うちも気をつけなきゃ」

「非国民だったんだ、あのお父さん」

とてつもなく、息苦しい社会。戦地で戦うお兄ちゃんやお父さんは、どんな思いで残された家族のことを考えていたのだろう。「家族への手紙」または家族から「戦地への手紙」を書かせてみていいかもしれない。そこに、正直に書くことすらためらう、何かを感じ取っているだろうと思う。

こうして1時間の授業を終えた。生徒のワークシートを紹介する。次々に起こる戦時下の出来事をうけとめて、「どうして歴史を勉強するのか」その意味を受け止めてくれた。

【生徒のワークシート】

学習活動

戦争がはじまって、私の家族は、生活は…

番号 4) 家族 おばあちゃん、お父さん、次男、長女、三男

私は 次男 18 歳

2組

家族にあったできごと	その影響で家族の生活は？
兄が出生	一番上のお兄ちゃんがお国のために戦争に行くと、妹は街角に泣いておんぼをしてた。確かなのは自分だけ
銅がとられる	なパンや包丁など、いちいち買わされた。料理を作るのが困難に。
食物が配給制、玄米に	ご飯はいっぱいあるけど、おかずが無い。しかも、玄米になった。甘いものも食べれない。
物価が高くなる	買ったものは、どんどん高くなる。ほしいものが手に入らない。貯金に行った。
志願兵が募集される。自分も行くことになった。	次男の自分が戦争に行かなければならぬ。妹と弟は苦勞するかも。
妹が中学生工場に行く。	人が足りないから、中学生だけ工場で働くことになりそう。

【私】に想像力を働かせどんなことを思い日々を過ごしていたか書いてみよう

少し前までは中国に勝て、日本はすこぶると思うのに、気が付けばもう総力戦になっている。お国のためとはいえ、どうしてこうなってしまったのだらう…。でも、私の国のためにしっかりと働かなければ…。

■今日の学習を通して考えた事

両親や祖父母から戦争についてよく聞きます。悲惨で残酷で…ということば聞いていました。実際に体験するつもりになると、本当につらいと思います。どうして歴史を勉強するのか、改めてわかった気がします。戦争体験者が少なくなると、周りに怖い国もたくさんある分、せつない戦争が走ってしまわないでほしいです。

3 そして、敗戦に向かう日本

授業は、「(11) 餓死、玉砕、特攻一戦局の転換」へと進む。その導入は、玉砕の地であるガダルカナルから還ってきた「英霊」の葬列だ。万歳と日の丸を振って送り出した兵隊たちの死。「海ゆかば」を教室に流しながら地域の護国神社に向かう様子を画像で示した。まだ、本土は戦場になっていない。

政府の情報統制で、新聞もラジオも戦場の姿をねじまげ、国民は「勝利」を信じさせられ、少国民は「命をかける」ことを夢見る。死ねば英霊として靖国の御霊になるのだと。

「出征したお兄さんや、お父さんが、英霊となって還ってきました。名誉なことですね」と問うと、みんな静かに首をふっている。身近な人が亡くなるのが悲しみでないはずはないのだ。

制空・制海権を失い、孤立する太平洋の島々に多くの兵士がいた。「勇ましい戦死」「玉砕」と報じられた死の現場について、教科書 p. 244 に紹介する新聞報道と写真は示している。

その戦場は、模擬家族とはいえ、肉親を送った場所だった。

「赤紙一枚で、どこで戦っていたのだろう」

「空腹をこらえて、乏しい配給生活に耐えて、戦地の兵隊さんに、お父さんたちにと送った食糧は、補給船の多くが太平洋で沈められ、戦場の兵隊さんには届かなかったのです」

「金属供出し、勤労報国し、製造した飛行機や軍艦も、多くの兵士の命とともに太平洋の藻屑となったのです。供出した馬は70万頭から100万頭と言われてますが、みな帰ってきませんでした」

「千人針も、勇ましい日の丸の寄せ書きも命を救いません」



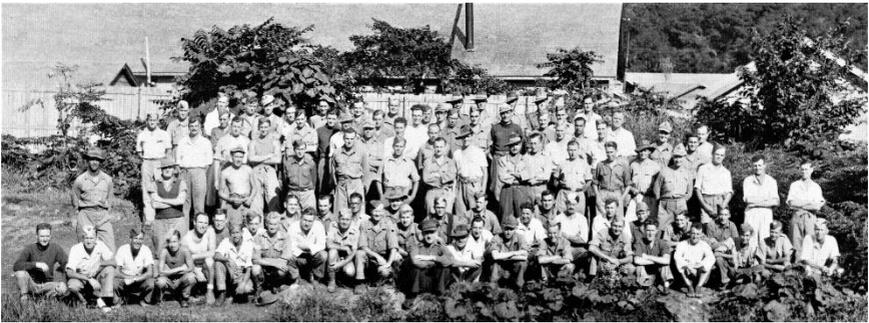
13 葬列と「海ゆかば」

教室中が、静まりかえる。

もう一度長い長い遺骨の列が戻ってくる様子、「海ゆかば」の演奏。札幌もアツ島玉砕の「英霊」の列は1kmにも連なったという。

そしてこの授業で伝えたいのは、勇ましく戦って死んで「靖国の英霊」になるという宗教とともに、「生きて虜囚の辱めを受けず」の戦陣訓が、国際法で認められていたはずの投降を許さず、最後まで突撃して死ぬ（自殺行為だ）ことを選ばせたということだ。

北海道内には連合国軍の「捕虜収容所」がある。（写真¹⁴）



¹⁴ 函館捕虜収容所 第1分所（芦別市）

日本兵には「恥」と教えながら、捕虜を国際法に準拠して収容するのだから、決して褒められた待遇ではなかった。だから、戦後各地の戦犯裁判所で捕虜への虐待が問われ多くの日本兵が処罰された。でも、ここには確かに「国際法」が存在している。「命綱」を兵士に与えなかった大日本帝国の過ちを、生徒に教えずにおれない。

そして「(12) 町は火の海—本土空襲」の時を迎える。

清沢洌の記したように、本土の帝国臣民の上に爆弾が降ってきた。兵士の命を紙くずのように無残に見殺し、沖縄を捨て石にする「大日本帝国」は、本土の国民の「命」さえも守ることはない。

「空襲は恐れることはない」

「火は消さねばならぬ」

「逃げ出すと食糧停止」

次々に出される命令。東京大空襲をはじめ、全国が空襲を受け、沖縄では絶望的な状況にあっても、鈴木首相は「滅私奉公、全国民一体となって、国体護持のため、断じて戦い抜け」と檄を飛ばした。

「次々に襲う空襲の中、6番の家族、校長先生は奉安殿を守るために学校に行って亡くなった」

「青函連絡船の航海士をしているお父さんの家族がいたね。青函航路を管轄する軍に対し1945年7月13日、この家族のモデルになった国鉄職員さんは『東京方面からの情報で、明日青函航路が空襲を受ける可能性があります。運航を停止し避難させるべきです』と軍に上申しました。でも『空襲されようと、永久要塞（函館山）は万全の備えがある！ 貴様の考えは“敗戦思想”だ！』と一蹴され聞き入れられませんでした」

青函航路は、北海道の石炭を京浜などの工業地帯に送る軍の生命線。軍に強いられて出港した青函連絡船は、空襲を受け13隻が沈められた。「永久要塞」の威力を信じろと言われた函館山からは一発の砲弾も撃たれることはなかった。7月14、15日の「北海道空襲」での出来事だ。

各地に、多くの本当に胸が痛くなる「事実」がある。模擬家族の思いを抱えな



断じて戦ひ抜く = 総力集結の臨時會議 =

帝國議會開会の鈴木内閣総理大臣の演説主旨
今日沖縄の戦況は誠に憂慮すべきものがあり、やがては本土の他の地帯にも敵の侵寇をみるやもしれぬ情勢となつてゐる。…敵の空襲熾烈となり今後益々苛烈を加ふことは必然であるが…中略
…一部の戦況に失望せず、滅私奉公、全国民一體となつて國體を護持し「一人以て國を興す」の決意を以て責務を果し、最大の努力と工夫を凝し、目標を戦争完遂の一貼に凝集して一人残らず決死敢闘するとき、國民道義は確立せられ、戦力を發揮し得るものと信ずる。

『写真週報』373号 昭和20年6月21日

がら、戦争の終末期を迎える時には、まだ続くのか、また辛い思いをするのかと、
「(13) 荒れ狂う鉄の暴風ー沖繩戦」「(14) にんげんをかえせー原爆投下」と続く教科書や資料にあるできごとが、みな生徒自身に重なってくるようだ。

そして「(15) 本土決戦か、降伏かー日本の敗戦」の学習。「国体護持」にこだわる政府によるポツダム宣言受諾までの顛末を学習し、やっと戦争は終わった。でも、北海道では8月15日以後の戦争を語ることになる。「樺太」と「千島」での対ソ連戦だ。住民も国民義勇軍となり戦いを強いられ、また自決へと追い込まれた。「わが家の20世紀」について調べている生徒たちの中に、樺太や千島からの引き揚げ家族も多い。

「満州の開拓農家は、3歳児を連れて逃避行に出ます。集団自決の村もあります。置き去りにされた子どももいました。2～4歳が多かったそうです」

「それ、オレのことか…」

「私が子どもを置き去りにするの…」

「みなさんの模擬家族は、どんな戦争体験をしたのでしょうか。そして今、ここにいるみなさんの家には、どんな戦争の歴史があったのでしょうか。もう一度、わが家の歴史レポートを見直してみてください」

【 図版 】

1・3・4・8 立命館大学国際平和ミュージアム 所蔵

5・6・7・10・11・12 内閣情報局「写真週報」アジア歴史資料センター 公開

9 本別町歴史民俗資料館 所蔵

14 芦別市星の降る里百年記念館 提供

(公立中学校教員)